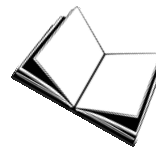




子ども読書支援センターニュース 第17号



2016.1.8

山梨県子ども読書支援センター

本誌は、県民の皆様に山梨県子ども読書支援センターのことをより深く知っていただくため、
当センターの事業や活動内容について情報発信するものです。

>>第3回子どもの読書活動推進スキルアップ講座を開催しました。

10月29日（木）に「読書マラソンの取り組み—大学生に向けた読書推進活動—」と題して、愛知教育大学生活協同組合職員の小西真穂氏を講師に講座を実施しました。図書館司書や学校司書、大学の職員など24名の参加がありました。

読書マラソンとは、「大学4年間で本を100冊読もう！」を目標に、全国の大学生協で行われている取り組みです。今回の講座では、まず初めに読書マラソンのしくみと“ランナー”と呼ばれる参加学生の様子を説明していただきました。読書マラソンでは、読んだ本の数を競うことが目的ではなく、本を通して人と交流し、本を読むことの楽しさを共有することを目的としているそうです。

次に、読んだ本についての感想を記入する“コメントカード”の中から、年1回優秀賞を選び表彰する、読書マラソンコメント大賞と、それに関連する各大学独自の取り組みについて、実際の例を挙げながらお話していただきました。

また、愛知教育大学で行われている読書推進サークル「きしゃぽっぽクラブ」の取り組みについても紹介していただきました。初めは、一人で本を読む方が好きだと言っていた学生たちも、読書マラソンの運営や学内での読書推進活動を通し、様々な人と関わる中で、サークル活動を楽しみ、自信を持つようになったそうです。学生自身の成長につながっているのではないかとという講師の考察から、読書活動の意義について、改めて考える良い機会となりました。

参加者からは、「若い大学生のアイデアには魅力があり、生協書店の取り組みを知ることができて、実のある講座だった。」「読書マラソンは大変興味深く、特にコメントカードの書き方は本の紹介文を書く際の参考になった。」等の感想が寄せられました。



▲講座の様子

>>竪穴住居でおはなし会に参加しました。（講師派遣報告）



▲おはなし会の様子

11月1日（日）、山梨県立考古博物館において「竪穴住居でおはなし会」を行いました。会場は、敷地内に建てられている竪穴住居の中でした。いつもは暗い竪穴住居の中に、当日はライトが設置されて絵がよく見えるようになっていました。床にはマットも敷かれ、いつもとはちょっと違った雰囲気の中でのおはなし会となりました。

参加者のみなさんには、考古博物館で開催していた特別展「縄文の美～世界に誇るJOMON芸術～」にちなんだ絵本の読み聞かせや、どんぐりを使った「おてぶしてぶし」の手遊びなどを楽しんでもいただきました。大変楽しいおはなし会となりました。

＞＞児童青少年サービス講座中級編・第2回及び、第3回を実施しました。

児童青少年サービス講座中級編の第2回を9月10日（木）、第3回を10月23日（金）に開催しました。

第2回は、「蔵書を活かすブックトーク」と題して、元東京都立多摩図書館司書で、現在、児童図書館研究会運営委員長の杉山きく子氏に講義いただきました。

最初に、杉山氏によるブックトークの実演を聞いた後、講義に入りました。

本を選ぶ時は、紹介者がおもしろいと感じ、子どもにすすめたいと考えるものを選ぶこと、子どもは見た目を重視するので、手に取られにくい本でも、魅力のあるものを紹介することも大事とのお話でした。

実際に本を紹介していく時は、杉山氏は、一番紹介したい本から順番に本を紹介していくそうです。また、全ての本であらすじを紹介するのではなく、1冊丸ごと楽しめるものを入れたり、魅力的なところを取り上げて、ストレートにその部分だけを紹介するなどのポイントも伺いました。講義後には、説明いただいたポイントを踏まえた、別のブックトークも実演いただきました。その後、受講者が事前課題で取り組んだミニブックトークの発表に対し、丁寧なアドバイスや講評をしていただきました。

受講者からは「講師や他の受講生のブックトークの実演を聞いて勉強になったので、すぐに実践してみようと思った。」「“ことばが商売道具”“ことばで伝える”という言葉が印象的で、本を紹介する上で考えなければならないことだ。」等の感想が寄せられました。

第3回は、（株）偕成社編集部部長の別府章子氏に「いま、子どもの本をつくる・届けるー児童図書の編集・出版ー」と題して、講義いただきました。偕成社は、来年80周年を迎える子どもの本の出版社として、子どもに希望の持てる本を目指し、基本的にロングセラー本を大切にしていること、読者アンケートハガキを大切にしていることなど、具体的な例を交えながらお話いただきました。また、編集者の仕事についても、イラストレーターの展覧会や海外のブックフェアにも足を運び、インターネットの時代でも、人に会って話をするを大切にしているとお話でした。



▲第3回講座の様子

「編集者や作家の話聞く機会はなかなかないのでよかった。」等の感想が寄せられ、出版社を身近に感じる事ができたようです。



▲第2回講座の様子

後半は、別府氏が担当している「ミルキー杉山」シリーズの著者、児童文学作家の杉山亮氏をゲストにお迎えし、対談形式でお話いただきました。お二人の出会い、出版社や編集者との関係など、貴重なお話を伺うことができました。中でも、杉山氏の「子どもには、いろいろなおもしろい経験を積み重ね、『おもしろがり上手』になってほしいと思っている。本を読むこともそう。」との言葉が印象的でした。

受講者からは、「編集者の思いや一冊に傾ける情熱が伝わった。」「出版社に個人の意見がしっかり届いていることがわかった。」